SDGs 持続可能な未来へ

SDGsの17目標

1 貧困をなくそう
2 飢餓をゼロに
3 すべての人に健康と福祉を
4 質の高い教育をみんなに
5 ジェンダー平等を実現しよう
6 安全な水とトイレを世界中に
7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに
8 働きがいも経済成長も
9 産業と技術革新の基盤をつくろう
10 人や国の不平等をなくそう
11 住み続けられるまちづくりを
12 つくる責任つかう責任
13 気候変動に具体的な対策を
14 海の豊かさを守ろう
15 陸の豊かさも守ろう
16 平和と公正をすべての人に
17 パートナーシップで目標を達成しよう

㊨太陽光パネルやセミナーハウスを背に笑顔で話す坂本純科さん
㊧野菜の苗を植える「農的暮らしの講座」の参加者たち
（写真はいずれも５月24日、野沢俊介撮影）

エコビレッジ 自給自足の暮らし

余市で実践 坂本さん

SDGsの目指す持続可能な世界の実現を、地方の小さなコミュニティーで実践する場が後志管内余市町の「余市エコビレッジ」だ。丘陵地の6㌶に農場や果樹園、共同生活のためのシェアハウスやセミナーハウスなどがある。太陽光など再生可能エネルギーを活用し、おがくずを使って排せつ物を処理するトイレも備える。農作業の講座が開かれた5月下旬の週末に現地を訪ねた。

エコビレッジはエコロジー（環境）とビレッジ（村）を合わせた言葉。欧州をはじめ世界中に大小1万カ所以上あるとされる。食やエネルギーの地産地消、自給自足による循環型で持続可能な生活の場を目指す。

自然と人のつながり

「ここに手を入れてみて。あったかいから」。余市エコビレッジで開かれた「農的暮らしの講座」で講師役を務めた坂本純科（じゅんか）さん(59)が声をかけると、生ごみや刈草などを発酵させた堆肥に参加者が触れる。「ほんとだ、ふかふかで温かい」

この日の講座では10人ほどの参加者が堆肥作りなどを学び、トマトやシソの苗を植えた。坂本さんは「単なる野菜の栽培講座ではありません。自分の生活に必要なものを、一方的に消費するのでなく、自分たちの手で、協力し合って生産する。自然とのつながり、人とのつながりを自覚するための講座です」と話した。

坂本さんは余市エコビレッジを運営するNPO法人北海道エコビレッジ推進プロジェクトの理事長。埼玉県出身で北海道大を出て札幌市役所で働いた後、欧州各地のエコビレッジを訪問。帰国後、2009年に空知管内長沼町で体験塾を開き、12年に拠点を余市に移した。今では年間約2千人が視察や研修などで訪れるようになった。

午前の作業を終えての昼食は高校家庭科教師の加藤佳江さん(58)がボランティアで札幌から来て作った。アスパラやタマネギ、セリやワラビなど、この農場や地元で採れた野菜、山菜をふんだんに使った手料理が並ぶ。加藤さんは「旬の食材で料理が作れて、それを食べた人が喜んでくれるのがうれしい」と話す。

ここで採れたヨモギを練り込んだ団子も振る舞われた。作ったのは胆振管内豊浦町の北海道シュタイナー学園いずみの学校からインターン（就業体験）で来ている山崎臣（おみ）さん(18)。循環型社会に興味があって今年中にアフリカに行きたいという山崎さんは「国内外から訪れるいろんな人と話すことができて視野が広がります」と話した。

子どもの喜びが希望

丘を少し登って、坂本さんの住居のタイニーハウス（小さな家）を見せてもらった。出力300㍗の太陽光パネルで電気を賄う。冬場の暖房はまきストーブ。風呂や冷蔵庫、洗濯機などはシェアハウスで共有する。「電気は無駄につけずに消す。使う水も少なくしようと工夫する。自分が暮らすために、どれだけの電気や水が必要なのか、おのずと考えることになります」

余市エコビレッジの会員は約120人。坂本さんによると自分探しの若者が3分の1、第2の人生を考える中高年が3分の1、あとは都会の生活様式に田舎暮らしの要素を入れたい人といったイメージだという。「エコビレッジを訪れた人が『気づき』を持ち帰って、家庭や職場などで環境にやさしい暮らしを実践してほしい。身近なところから、地域や地球の環境を考えるきっかけにしてほしい」と坂本さんは願っている。

この日の講座にも参加した会員の日下部紗己（さき）さん(30)は小樽市でアレルギーのある人も食べられる菓子の店を営む。農業は未経験だったが「土づくりから分かりやすく教えてもらって勉強になります」という。「春の景色がすごくきれい。黄色いじゅうたんのようなタンポポやピンクや白の花。楽園のような場所です」。講座以外でも週末に訪れ、3歳の娘が喜んで走り回るという。

坂本さんは昨年出版した著書「遊ぶように暮らし、暮らすように働く」に書いている。〈「エコビレッジに住みたい」と言ってくれる子どもたちの言葉が、この場所の可能性であり、希望だ〉。持続可能な暮らしの実現に向けて、エコビレッジの挑戦は続く。（編集委員　関口裕士）

定植する野菜の苗を手に参加者に説明する坂本さん

苗床を作るために土を運ぶ講座参加者

地元の野菜や山菜をふんだんに使った昼食

敷地内で育てられているニワトリ

（C）北海道新聞社　無断転載、複製および頒布は禁止します。